

希少猛禽類の保全とエゾシカ対策の実施に関する意見交換会

2010年3月23日 釧路地方合同庁舎5階 第一会議室

出席者

希少猛禽類専門家

白木彩子 東京農業大学生物産業学部 講師 (欠席)
竹中 健 シマフクロウ環境研究会 代表
中川 元 斜里町立知床博物館 館長
藤巻裕蔵 帯広畜産大学名誉教授
山本純郎 日本鳥類標識協会 会員
涌坂周一 羅臼町教育委員会 郷土資料室長

エゾシカ対策専門家(知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカWG委員)

梶 光一 東京農工大学大学院教授 (エゾシカWG座長)
石川幸男 専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科教授
宇野裕之 北海道環境科学研究センター主任研究員兼野生動物科長
常田邦彦 財団法人 自然環境研究センター研究主幹
松田裕之 横浜国立大学環境情報研究院教授

行政機関

環境省釧路自然環境事務所・林野庁北海道森林管理局・北海道・斜里町・羅臼町
事務局

(財)知床財団

オブザーバー

北海道大学大学院 農学院 今榮博司

希少猛禽類の生息情報を含むため、会議および会議資料は非公開。

議事概要(要約)**第 部 知床半島における希少猛禽類の保護管理とエゾシカ対策についての情報共有****(1) 知床半島における希少猛禽類の現状と保護対策について**

・銃器によるエゾシカの捕獲に関しては、(狩猟のように)不特定の人の入り込みがあることが一番問題。時間や場所などを決めて入などの対策をとることができるなら、工夫が可能。

- ・かつて脅威であった森林伐採は、今は多くは止まっている。シマフクロウの保護は当面は巣箱で対応することが可能。シカ対策や森林の保全はこの100～200年の課題であるが、シマフクロウの保全はこの10～20年の間の急務の課題。
- ・各地で行われているシマフクロウの森作りという植林事業では、苗木はほとんどシカが食べてしまっている。長期的な生態系保全を考えるならば、シカ対策と猛禽類の対策は、共同で作業が出来るはず。1999年までにミズナラの大木までシカによる食害を受けるようになった。そのような見方をすれば、この10年、20年は、この300年間の中でも非常に大きな劇的な変化が起こっていると、言える。
- ・シマフクロウの個体数の変動は、地域的な差がかなりある。日高支庁管内ではこれまでほとんど対策がとられていなかったこともあり、この20年間でかなり個体数は減ってしまった。そのため1990年代に入って対策がとられるようになり、下げ止まった。知床や根室支庁管内は早くから対策がとられて来た地域でもあり、やや増えている状態。
- ・知床半島のシマフクロウのつがいのほぼすべてが巣箱で繁殖。先端部は河川の規模が小さく大径木も少ないため、生息環境のレベルも低い。

(2) 知床半島におけるエゾシカの現状と保護管理対策について

- ・2006年11月に策定されたエゾシカ保護管理の中にも大きな基本方針として「希少鳥類への影響に配慮する」という文言はあったが、具体的に出てきたのは、翌年の実行計画策定時点から。先行してシカ対策を実施してきたのは知床岬。岬については、専門家と協議しながら進めてきた。
- ・植生の回復は、植生の中身によっても大きく違う。風衝地では柵で囲えば、見た目上は5～7年で回復する。ただし、種数は半減していてなかなか増えてこない。しかし、海岸植生には、断崖上のレフュージアにシードソースがあるので、回復は早い可能性が高い。森林はどのくらいで回復できるかまだよく分らない。小径木がない状態でも、上層木があれば数十年単位では回復できるはず。植物群落によって、回復のシナリオは変わってくる。
- ・管理計画上では、まずは、3年間で半減させることが目標。それが出来なければ、それ以下には下げられないだろう。まずは3年で半減を目処とする中で、その間の植生の回復の様子を反応を見ながら、今後の目標数字を決めていこうという狙いである。本来なら数十頭レベルが妥当。

- ・数年おきにエゾシカのクラッシュ（大量死）が起きるが、クラッシュの際に死ぬのはオスと子であり、メスは残る。メスを減らさないと個体数は減らない。過去には地域的な個体群が何度も絶滅をしているという事実は確かである。
- ・雪解けとともに順次芽吹いていく草本は、開花前に多汁質で高タンパク。一般的に、シカの仲間が雪解けとともにこれらの栄養価の高い食物を求めて高山帯に進出することはよくあることである。また、低地で増え過ぎているということはあるだろう。条件のいいところはもう満杯状態になってしまっている。
- ・日本生態学会での議論も、以前は人間のいないときには生態系の調和はとれていた、という考え方であった。しかし、一旦、人の影響で崩れてしまったバランスは、人が手を引いても元に戻そうとしても戻らないという事例がさまざまに出てきてしまった。
- ・シカの対策に関しては現段階では法的規制もありバラエティが少ないことも問題。銃猟やワナ以外にも第3の策が必要では、との意見もあった。植生に関しては、シカが植生に悪影響を与えているということは明らかであるが、その悪影響が希少猛禽にとってどこまで切迫した問題なのかの指標がない。どういう植生になってしまったら、希少猛禽に悪影響があるのか、どのような植生であれば、シカ対策も猛禽類の保全も両立できるのかを考える必要があるという議論もあった。
- ・知床五湖裏の周辺は一時期シカの食圧がかなりありエゾノユズリハくらいしかないような状況もあったが、その後シカが減少してギョウジャニンニクなどもみられるようになり、最近回復してきているようにもみえる。ある限られた地域かもしれないが、変化も一様ではない。クマが多いとシカが出てこなくなるのという可能性もあると思う。
- ・シカによる影響は、直接営巣木への影響だけを見るのではなく、そこに生息する一般鳥類や昆虫、両生爬虫類なども含めた生態系すべてへの影響を見るべき。
- ・一部の地域しか調べられていないが、メスジカ 100 頭あたりの子の数をみると、岩尾別地区では 20 頭前後、ルシャ地区ではわずか 4 頭である。シカの繁殖力が良好であれば、メスジカ 100 頭あたりの子の数は 60 頭くらいになるので、現在の知床では子ジカの生存率はかなり低い。クマが多くの出産直後の子ジカを捕食している。しかしながらこのくらいの数では、全体数の急増は抑えられているが、全体数では高止まりのままであり、クマがシカの数減らすところまではいってないと考えている。岬での捕獲の最高年齢が 18 歳。高齢まで出産する。

- ・シカの生存に大きな影響を与える大雪は1980年までのデータで、20年に1回程度となっているが、ここ30年間ではシカが死ぬような豪雪はほとんど来ていない。各地でシカのクラッシュが起きた1984年の豪雪は全国的だった。春先に降って長く積雪が続いた。しかし、シカは個体数のクラッシュがあっても、数年でまたすぐ回復してしまう。

第 部 知床半島における希少猛禽類の保全に配慮したエゾシカ対策について

(1) 知床各地域における希少猛禽類に配慮したエゾシカ捕獲手法の検討

- ・費用対効果については、事務局でも考えている。知床岬での仕切り柵の設置については、設置時には建設コストがかかるが、捕獲を継続することで毎年の捕獲にかかるコストを2分の1から3分の1程度に抑えることができ、結果として費用を抑えることができると考えている。
- ・エゾシカの捕獲を実施するには、定点カメラ等の活用により、1年間を通じたシカの集結状況や、希少猛禽類の状況のモニタリングが必要。
- ・他の機関が実施する工事では、2月に希少猛禽類が営巣木から飛び立たせるなどということは、絶対にないように指導している。2月であれば、普通は工事などでは入らせない時期である。希少猛禽類の繁殖期以外の時期での捕獲を試行してみたい。
- ・希少猛禽類に関して起こっては困ることを明確にすべき。例えば、営巣木が失われること、とか、2年続けて営巣に失敗すること、など明確な基準が必要。そうでないと、何がやってはならないことがわからない。
- ・エゾシカの捕獲を希少猛禽類の繁殖期以外に実施する場合、もっとコストは上がる。ワナによる捕獲の方が低コストで効率がよいと思うかもしれないが、ワナ捕獲も実はとてもお金がかかる。また、囲いワナも捕獲可能な時期は、やはり積雪期の1、2、3月となり、希少猛禽類の繁殖期と重なる。
- ・希少猛禽類のモニタリングに対して、環境省はきちんと考えてほしい。施設建設工事の際などもそうだが、ほかに比べて環境省自身の事業に関しては配慮が足りないのではないかと。希少猛禽類のモニタリングをあまりきちんと行っていないという印象を受ける。実験的な事業なのであればあるほど、さまざまなデータを取るべきなのは。
- ・鉛中毒については、周知徹底に努めているが、なかなか根絶が難しい。パトロールや説明会、マスコミへの情報提供など行っていきたい。ただ、最終的には所持自体を法的に規制しない限り、難しいところがある。

- ・鉛中毒に関して、猟友会でハンターへの再教育を実施する、現場での巡視を強化する、一般への周知を図る等の対策が必要。
- ・全道でワナによるエゾシカの捕獲がどのくらいの数があるのかを、きちんと出してほしい。ワナによる捕獲を全道一斉に行うことで、壊滅的なダメージを与えることも可能なのではないか。ハンターの数が減る中では、今後はワナを使うしかないのでは。農閑期の雇用にもなる。
- ・先日イギリスで視察した英国鳥類保護協会の保護区では、導入されたニホンジカが増えて問題になっている。元軍人の射手と補助員の2名がストーキングによる狙撃（忍び猟）によって、年間400～500頭を捕獲している。日の出前1時間、日の出後1時間のシカが良く出る時間帯に獲る。日中はバードウォッチャーもいるので捕獲しない。銃器はサイレンサー付きのライフルを用いている。鳥類保護協会という保護団体が、生物多様性の保全のためにハンターを雇ってシカを捕獲しているという例である。シカ肉は販売して保護区の維持管理費に充てている。
- ・岩尾別の100平米運動地ではシカが最大の問題であり、個体数調整の受入について現在検討中である。遺産地域の隣接地域については、輪採制をやめるとしても、駆除としてどこまでも予算を使ってやっていくことはできない。今後も対策等については引き続き協議をさせていただきたい。
- ・羅臼町はシカの駆除に対し、メス1頭あたり3,000円の報償費を100頭分しか予算計上していない。町だけでできることは限られているため、今後も国や道と連携して対策等を進めていきたい。